

# 「豊臣期大坂図屏風」デジタルコンテンツの制作について

井 浦 崇

「豊臣期大坂図屏風」は、現存例の極めて少ない「平和に繁栄する豊臣期の大阪を描いた作品」である。オーストリアで発見され、2007年に関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターと大阪城天守閣、オーストリアの州立博物館ヨアネウムの三者間で研究協定が結ばれ、共同研究が行われた。

2011年の7月に開催された国際シンポジウム、「再び『豊臣期大坂図屏風』を読む—人物・意匠・城郭・生業・年中行事—」で屏風の細部を検討するにあたって、参加者に基本的な知識を周知させるためのデジタルコンテンツを制作した。制作にあたっては所蔵先のエッゲンベルク城博物館の協力を得た。このコンテンツを使用して内田吉哉氏（関西大学大阪都市遺産研究センター特別任用研究員）とともに「屏風案内」を行った。その後8月には堂島リバーフォーラムで行われた「ナレッジキャピタルトライアル2011」において別バージョンを出品し、現在も引き続き改良を加えながら Web コンテンツとして一般公開を予定している。

国際シンポジウムのための「屏風案内」は、15分程度で簡潔に屏風を解説することを目標として Flash で制作した。主に3つのパートに分けられ、それぞれ屏風がヨーロッパでたどった経緯、屏風全体の画面構成、屏風に描かれた景観について解説している。

まず最初のパートでは、現在屏風を所蔵して



歴代城主の説明画面

いるオーストリア・エッゲンベルク城の地理情報から展示状況、歴代城主と屏風との関係などをまとめている。

そして屏風を現代地図と照らし合わせながら、描かれた次の場所の地理的關係を図説した。  
・大坂城 ・八軒家の船着場 ・高麗橋 ・住吉大社 ・四天王寺 ・宇治平等院 ・石清水八幡宮 ・天王山（宝積寺）



地理的関係を図説

地理的關係や建築の外見は屏風の中で大きくデフォルメされており、容易に現在の大阪と重ね合わせることができない。そこで屏風の画像と地図が連動したインタラクティブなシステムを使った図説を行なった。特に京都～大坂間が描かれた第8扇は距離、方位ともに歪みが大きいので、別画面で図示した。そして最後に、屏風に描かれた景観で場所が特定されたものを、現在の風景写真と対比しながら解説している。

「ナレッジキャピタルトライアル2011」では24面タイルド・ディスプレイによる高解像度表示を生かした別バージョンを展示した。

エッゲンベルク城は現在世界遺産であり、城内の壁にはめ込まれているこの屏風絵は、日本で実物を鑑賞することができない。そこで実物以上に拡大した画像を合計4096×11520ピクセルの高解像度で鑑賞できるコンテンツを制作した。さらに「屏風案内」で制作したコンテンツをもとに、地理的關係図説と、現在風景との対比の解説表示を組み込むことで鑑賞者に屏風の



24面タイルド・ディスプレイ展示風景

解説を行っている。会場では iPod を使ったマルチタッチコントローラーを操作して、解説者と鑑賞者が屏風の表示操作を行った。

Webバージョンでは国際シンポジウムの「屏風案内」において口頭で説明していた内容が文章で表示され、ユーザーがインタラクティブに操作できるようにしている。



Webバージョンのトップページ

特に地理的關係と現在風景との対比を一つのインターフェイス画面に収めることで、描かれた内容をわかりやすく解説することに努めている。まず各地名のボタンを押すことで地図上の位置関係が表示され、横の「現在の風景との比較」ボタンを押すことで現在の写真との比較に



「現在の風景との比較」画面



Webバージョンの地理図説

切り替わる。

屏風の視点が北側から大坂城を見ていたため地理関係がわかりにくかった点も、北を下とした地図の表示で解消を試みた。

これら一連のデジタルコンテンツは、もともと国際シンポジウムの入門解説用として準備したこともあり、情報を整理して教育的効果を高める工夫が重ねられている。複雑な来歴を持ち、未だ不明な点も多い屏風であるが、明らかになった要素を丁寧に図示することを重視した。

今後の課題としては、新しい研究成果を盛り込む過程で、増えていく情報を整理する工夫が必要となる。そのためには、情報の分類と配置を常に再検討することが重要だと考えられる。たとえば「エッゲンベルク家の家系図」という項目が今はトップのメニューにあるが、他の情報が増えてくると「屏風についての詳細」の一部に組み込むか、あるいは他のエッゲンベルク城の紹介情報と一緒にまとめるといった再編が考えられる。

今後の発展性としては、「デジタル洛中洛外図屏風 島根県美本」（淡交社）のように鑑賞ブラウザのインターフェイスに統合検索システムを組み込むような高度なシステム開発も考えられる。しかし、新発見の「豊臣期大坂図屏風」は来歴や全体構図などの基本情報をまず十分に解説する必要があり、教育的効果を特に優先することになった。その結果、情報の種類ごとに適したナビゲーションを検討し、ユーザーが自然に扱える形態となった。今後もこの手法を展開していく場合は、常に柔軟な発想で情報伝達のためのデザインを考えることが重要といえるだろう。